訓蒙修身書

田村初太郎校閲
福田宇中編纂

二

大日本教育會書籍館
一八函
一架
三號
一二册
函
架
號

乙72
388

K110
184
2

明治十五年四月開雕

訓蒙修身書

積善館藏梓

東京圖書館藏

訓蒙修身書第二

緒言

此編ハ入學ノ兒童ヲシテ禮法ノ尊フベク謙遜ノ愛スベキモノヲ知セシメ往々疎ヨリ精ニ至リキヨリ高キニ及バシメント欲

ス故ニ尤モ學ビ易キ近淺ノ語數章ヲ摘取シ初等科第一年后期生徒ノ用書ニ供スルモノナリ

明治十四年十二月　編者識

禮愛敬

訓蒙修身書第二

田村初太郎校閲
林和太郎訂正
福田守中編纂

禮儀

○禮とは人を愛敬をするをいふ　人を愛とも

一錢費　万事買　禮儀　礼道

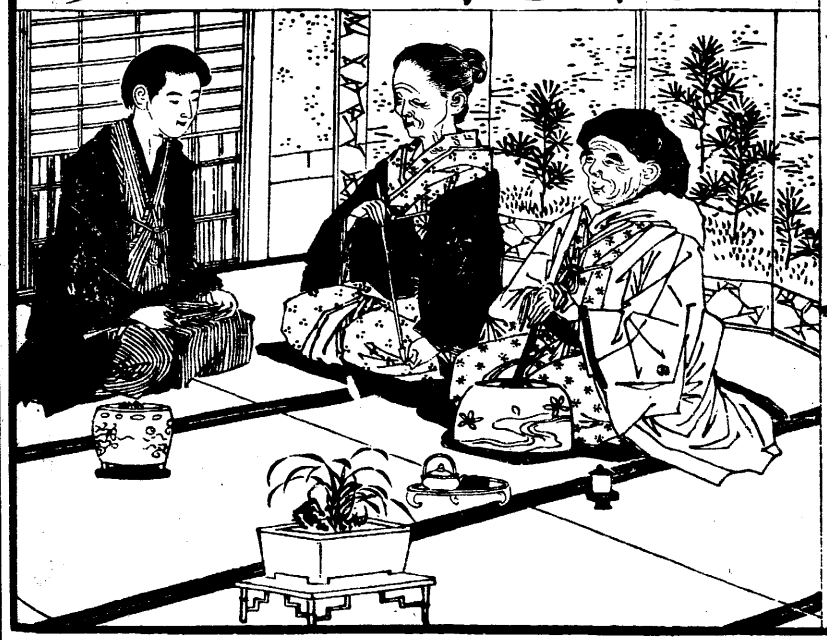
いつくしみ　敬ふ　人
をうやまふと　ふ
○一錢を　費やさびして
万事に　買ふるわれを
禮儀なり
○礼の道を　ふらざきば

孟梯額

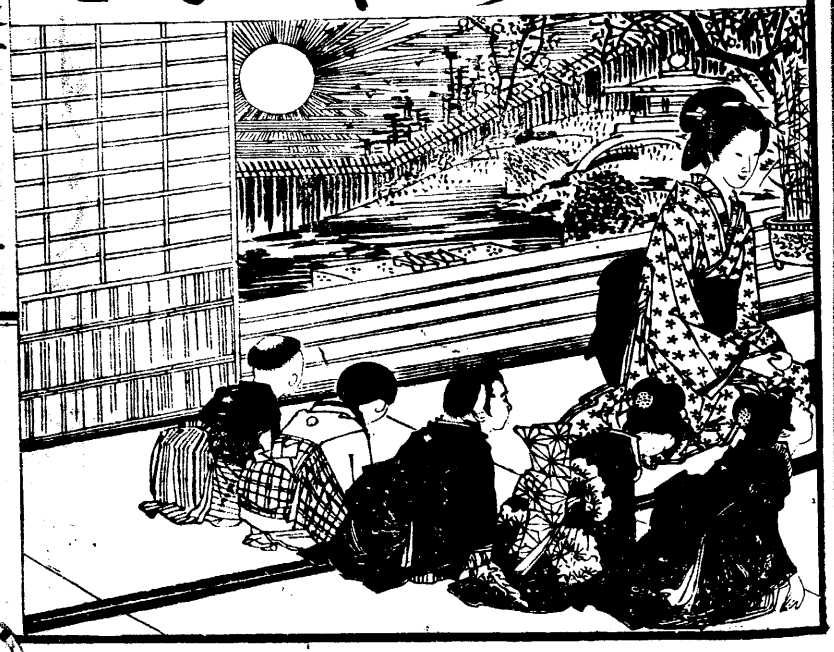
行　貴　賤

人の　行なひ　たつべ
からば
○禮ある　に　見て　人の
貴きを　ふを　礼なれを
見て　人の　賤ふ　に
しる

○父母に對たてい最も　よく敬礼を　つくさずんぐなるべからず



○子たるものは　はやくおきて　手および　顔を



衣服　父母前　客　歸　送

あらひ　口すゝぎ　衣服
を　ぬぎて　父母の　前
にて　礼をなすべし
○客のきたる　あるとき
内へ　むかへ　歸るときは
これを　送るべし

言葉　返辭　聲高

○人と　はなし　をするとき
は　言葉おとなしく
すべし　をばしく　する
を　禮にあらず
○返辭をほとぬて　聲
高に　はやく　いふべか

心安
狎
失
人前

らず
○人に　心安く　狎をぐ
べからず　禮を　失ふ
こと　あれどなり
○人の前にて　わらかを
しことを　いひ出す

侮
長者
面前
物食
四邊
仰見

屋からず　たをれ
る色　あらはし　人を
侮るべからず
○父母　長者の　面前にて
物を　食ふと　起を　四
邊　仰き　見るべからず

舌鼓　物授　丁寧

○をづて　物を　食ふと
きは　舌を鼓し　口我な
らば　づゝず
○人に　物を　授ける
とは　ひざまずきて　丁
寧に　渡をづし

戸障　子開　跪　開閉　心　禽　獸　近　學

○父母長者の　前にて
戸障子をど　跪きて　開
閉をづし
○禮なくば　かたちは
人なりとも　心を　禽獸
に近し　禮を學び　吾身

立居
異

の　立居ふるまひをただしくそなへくの　禮に　かなふをれば　こゝをれば　人の　人なる道　なりて　禽獸に　異なるところ　なし

學校朝　早起手洗口髪梳　述終　筆紙書物　取揃出行

○學校へ　行くにも　朝早く起き　手を洗ひ　口をすゝぎ　髪を梳ぶ　父母に　禮を述べ　終を　筆紙書物等を　取揃へ　出で行づ

歸

挨拶

○出るとき
と　歸るとき
はとき　にも
必父母に
挨拶をべ
し

席就

教師

○學校に入
るも　席に就
んと　する
とき　教
師に　禮を
なすべし

従　外見　雑談　職　児童教育司

○席に就てを　教師の
さしづに　従ふて　教を
うけ　外を見　またを
雑談を　すべからざ
○教師の　職とする所は
児童に　教育を　司る

宜　尊敬　代理　最　敬礼

えけなれば　宜しく　之
を　尊敬をべし
○教師も　するはら　父
母の　代理者とも　いふ
べき　もれなれば　最も
敬禮を　つくさざるべ

障子襖　静書物　取扱　毎日顔手

うらぶ

○障子襖等を　ゑらくは
静うに　すべし　書物
を　なるだけ　ていねい
に　取扱ふべし
○毎日顔手　まさを　衣

衣服清叅　校　誹朋友　争　何所師友　知人

服を　清らかにして　叅
校をべし
○人を誹り　或は　朋友
と　争ふ　すべからず
○何所すとも　師友又は
知人たる　人をあつべ

相互交　无用場所立无益物見疾走

礼を　ゐはづし
○すべて　相互の　交り
は　親しみ　敬ふべし
○無用の　場所ふ　立ち
無益の　物を　見るべ
からず　疾く　走るべ

昔漢土虞　芮國隣　西國君　田地境

らず　馬車などに　あ
ば　早く避くべし
○昔　漢土に　虞といふ
國と　芮といふ國や　隣
なりしが　西國の君は
田地の境を　あらそひて

久凌　周文王　德聞訴　伴　風俗　耕

久しく　決せざるゆへ
兩國の君　周の文王の
仁德を聞き　これを　訴
へんと　伴ふて　周のく
るへ　行くるが　そは風
俗と　見るふ　耕をもの

畔讓行　道男女　年老　負擔　朝廷作法　士太夫

は　畔を讓り　行ものは
道をゆぢり　男女道を
こゝふて行き　年老く
るもの　負ひ擔ふ　せび
朝廷の　作法を　見る
て　士そ　太夫のくめて

讓太夫卿　礼讓　思　我等年月　恥

讓を　太夫と　卿のた
めにゆづる　禮讓の　お
こなひ　のみふれず　兩
國の君　こゝを見て　思
ひけるを　我等の　年月
あらそひは　恥なり

彼　遂間田

かれをとて　彼のあら
そひ　田地を　たづね
に　ゆづりて　とる人ふ
く　遂に　間田と　な
るとぞ

衣服

衣服 身體 要 威儀 具 健康 最清

○衣服は　身體ぞ　まもるべ　要あり　威儀を　正
こうするの　具なり
○身體ぞ　ねよくし　健
康ならんと　それで　衣服
を　最も　清きもけを

著 垢汚

著るべし
○我衣服の　うつくしき
とて　人乃　衣服の　あ
やしきを　いとべるべ
○衣服の　垢けき　汚き
たるを　著れば　身體の

害且

健康を害し且人下いやしまは

位分

○人は衣服ふるまひて位を分ちことあり文官武官の服を異にするものなり

文官武官異

汚

○人の衣服乃汚きるとき清らかなるを見て人の品位を知るべし

清

品位知

○汚やしき衣服と着くれば吾身の威儀を

吾身威儀

世人親少樂性質論

うしろふ　はなはだ　ならず
世人の　親しみをも
少なふすべし
○衣服もまた　人を　樂
ましむるの　一つなり
人の　性質を　論ずるに

證多行儀正纏

それ衣服を　證とする
ことの　多し
○行儀正しき　人を　清
潔のふは　衣服を纏ひ
行儀正しからざる　人は
汚きたる　衣服を着る

富貴　賤　學問　身修

○富貴の人のうはべく
きこと衣服とうらやむ
なのれたとひ賤しき
もとにても學問を
はげみ身を修めば
うつくしき衣服を着

徒　寧

る　たはとなれもはと　な
はべし
○徒らふうつくしき
衣服を着るよりはい寧
ろ清らのるる衣服を
用ゆべし

貧　笑　自修　遂

○貧しき人の　衣服を
見て　それ　汚まてる式
笑ふべからず　學問を
なさば　身を修む　これを
をせざれば　遂に　賤し
き　身となるまて　人の笑

我領地通行　農人某　恩　物

ふとれるべし
○むかし　ペルシヤ國の王
我領地を　通行しける式
農人某は　これを見て
國王の　恩にあぢはひ
ふとられば　物の一川も

獻　身　両手　川

獻ぎてくおもへども
身ふるふ
はぐるま
ゆふ　兩の
手にて　川

水汲　飲　棒

は水を汲ミ
これまして
も　飲たま
ふて　國王
に　棒ぎれ
で　國王も

贈奇　妙　思其志　感厚禮　述　後漢魏昭

贈答をけく　奇ふしく
妙なるを　おのしく
思ふれども　其志
感じらを　厚く　禮を
述べられしと

○後漢の　魏昭と云人を

幼少郭泰先生　常　傍ふ使　病臥　命　粥

弟少けるとき　郭泰先生
に　まかび　常に　その
傍ふ　召し使をけるが
泰病につきて　臥せ
しつば　昭ち　命ぢく
粥を　煮さしむ　粥で

怒　責曰長者　意加　食　器地

きて　泰に　すむるふ
泰を　怒りて　これを
責て曰く　長者のため
に　粥を煮て　意を加へ
ざるべへ　食ふべうりに
と　うれ器を　地に　な

聽　叱

げうつるぢ　聽を　すこ
しも　聽をる色なく　ふ
たたび　粥を煮て　をを
むるふ　ますこれを　叱
るをけ　これをとく　す
ほうを　三たびるふ　昭

姿容變

敬禮

和歎

汝面

の姿容　すこしも　變らば　ゆゑなき　敬禮を　くはふるにあたり　泰色を　和歎ぎ　歎じて曰く　我日ごろ　汝の面を　見しが　今日もじめて　汝

取扱

の心を　見たりと　是よりは　昭を　ねんごろ　取扱ひ　たるぞ

武部芳峰画

訓蒙脩身書第二終

明治十五年三月十七日版權免許
同　四月　出版發兌

編輯兼出版　德島縣士族　福田宇中
大阪府東區安土町四丁目拾壹番地寄留

製本發賣所　大阪府平民　華井卯助
府下東區安土町四丁目拾壹番地

訓蒙修身書

田村初太郎校閲
福田宇中編纂

三

72
388

東京

大日本教育會書籍館
一八函
一架
三號
一二册

K/10
18
3